解脱房貞慶と『解深密経』

―峰定寺釈迦如来像納入の貞慶著「解深密経及び結縁文」を巡って―

野村卓美

一　はじめに

京都府左京区花脊峰定寺の副住職中村覚祐氏より、同寺蔵の釈迦如来像（以下、「峰定寺像」と略記）の納入品、貞慶著「解深密経及び結縁文」翻刻の許可を賜り、奈良国立博物館より写真版を提供された。本稿では「解深密経及び結縁文」の翻刻を行うが、その前に、「峰定寺像」奉納の経緯と仏師について考察し、「峰定寺像」と同様に『解深密経』が納入されている奈良伝香寺蔵地蔵菩薩像（以下、「伝香寺像」と略記）に結縁した僧侶と仏師について検討し、共に、貞慶の強い影響が読み取れることを指摘する。以下、不案内である美術史に関する史料・文献を多く参照した、諸賢のご叱正を賜りたい。

二　峰定寺蔵釈迦如来像の奉納の経緯と作者について

峰定寺の創建は久寿三年（一一五六）仲春二日に信西（一一〇六～五九）が著した『大悲山寺縁起』が詳しい。そこには、

久寿元年二月。建立三間堂一宇。奉安置白檀二尺千手観音菩薩像一躯。仏座下有石寶。水滴宛如檐溜。以之供閼伽。以之充盥滌。一尺三寸不動明王。五寸二童子像各一体。同毘沙門天像一体。至于同年四月。仙院忽降勅命奉請此像。

と、安置された仏像に関する記述もある。千手観音坐像・不動明王及び二童子立像・毘沙門天立像は現存しており、他に、胎内に「長寛元年（一一六三）六月廿八日」との銘文を有する仁王像もある。[1] これに加えて、現在重要文

化財に指定され、複数の納入品に正治元年（一一九九）とある「峰定寺像」がある。「峰定寺像」は成立年が明確であるのみならず、五輪塔形舎利塔・宝篋印陀羅尼等、数多くの納入品が存することでも著名である。井上一稔氏の詳細な調査によると、貞慶（一一五五～一二一三）とその関係者が多く見出せるのみならず、「貞慶に教えを受けたことを物語る」文言が記されていることが指摘[2]され、貞慶の宗教活動の一端を知る重要な仏像であることが明確になった。[3]

峰定寺に諸像が安置された経緯は『大悲山寺縁起』や仁王像の銘文等から推測出来るが、「峰定寺像」に関しては中野玄三氏の言及（補注（1）参照）が、調査した限りでは、唯一のようである。

氏は「峰定寺像」は「慶派仏師によって造立」されたとし、次のように推察する。前述した仁王像吽形には「仏師僧良元／長寛元年六月廿八日／沙彌生西平貞能母尼」とあり、仏師が良元、願主が生西（伝未詳）と平貞能の母親とわかる。平貞能は『保元物語』『平治物語』に登場する平家を代表する武将でありながら、戦場を離脱し、源家方の人物と親交を結ぶという数奇な人生を送る。氏は貞能について詳細な調査を行う。そして、『吾妻鏡』文治元年（一一八五）七月七日の、「故入道大相国（清盛）専一腹心者」である「前筑後守貞能」が「去比忽然而来二于宇都宮左衛門尉朝綱之許。」、そこで、「朝綱強申請」たという記事と、同じく『吾妻鏡』建久五年（一一九四）六月廿八日に東大寺大仏殿の仏像を鎌倉武士が造立した時に、「観音〈宇都宮左衛門尉朝綱法師〉」と宇都宮朝綱（一一二二～一二〇四）も関与したことに着目する。これらの諸像を担当したのは康慶・運慶・快慶等、慶派仏師である（『東大寺続要録』造仏篇）。これが因で朝綱が「峯定寺に慶派彫刻が寄進される起縁になった」とする。しかし、「峰定寺像」納入文書に全く言及しない推察であり、そのまま氏説を首肯することは難しい。

奉納の経緯解明には、「峰定寺像」納入品の文言を分析することが必要である。先ず、「施主」と記されていることに着目すべきであろう。「施主」とは「自らお金を出して法会を開き、また修行僧を供養する人」（『仏教語大辞典』（東京書籍））のことである。「施主丹波入道」

（五輪塔形舎利塔）・「施主丹波入道帰阿」（結縁文・樹葉）とあり、丹波入道が造像の際に経済的な支援をし、納入品を決定した中心的な人物である。では、丹波入道とは誰であろうか。五味文彦氏は『春日権現験記絵』（以下、『験記絵』と略記）第十五巻第三段に登場する「丹波入道浄恵」について詳細な調査をおこなう。それによると、同第五巻に登場する裕福な貴族藤原俊盛の男盛実（一一六〇～一二二六）が該当し、『吉記』元暦元年（一一八四）十一月十七日に「従四位上、藤原朝臣盛実〈丹波守〉」とあることも指摘する。[4] 氏の調査に導かれて、「峰定寺像」の「丹波入道」も藤原盛実であることを指摘した。[5] また、峰定寺は「古くは丹波国に属し」（『京都市の地名』（平凡社））ており、盛実の知行国であった。また、盛実の藤原氏末茂孫流は鳥羽院后美福門院・八条院暐子内親王との関係によって経済的に恵まれた貴族であったことも五味氏に指摘がある。西念は女院が遁世した折りの師で、鳥羽院崩御時の善知識[6]であり、その西念が開基である峰定寺を、末茂孫流一族が長く信仰していたことは否定出来ないのではなかろうか（補注（5）参照）。

加えて、貞慶との関係で考えると、前述した如く、峰定寺の開祖三瀧聖人西念は鳥羽院や美福門院との関係で著名であり、西念は貞慶の祖父信西とも親しかったことは、『大悲山寺縁起』の最後に「仏子西念聊記由縁以貽来葉也。／作者少納言入道〈法名／信西〉」と、西念が記した「由縁」を信西が入手・加筆していることからも推察できる。「峰定寺像」安置場所選定理由の一つにこのような背景を推察することが出来るのではなかろうか。

上述の推察は、「峰定寺像」が当初から同寺に奉納されたとの前提による。

次に、「峰定寺像」の作者について先学の研究を参照し、考察してみる。

美術史家も「峰定寺像」は成立年が明確な作品として注目し、幾つかの研究が存している。入手出来た論稿には、具体的に三人の仏師が挙げられている。戦前の研究では作者を特定出来ず、『日本国宝全集』第三十四輯（文部省。一九二八年九月）・明珍恒男[7]氏は不詳とする。水

野敬三郎[8]・毛利久[9]・清水善三等[10]の諸氏は強弱の差はあるが快慶との関係を指摘する。快慶が貞慶と緊密な関係にあったことは確認出来る。例えば、毛利氏紹介の『浄土寺縁起』[11]には

建久五年〈甲寅〉十五日〈略〉奉安置一丈六尺皆金色阿弥陀如来立像一躰。八尺観音勢至立像各一體。大仏師丹波法眼懐慶(ママ)。建久八年〈丁巳〉八月二十三日供養。道師(ママ)笠置解脱上人貞慶。

とあり、建久五年（一一九四）から播磨浄土寺阿弥陀如来像等を快慶が製作し、同八年に貞慶が導師をつとめている。同じく毛利氏（補注（9））紹介の『東大寺雑集』[12]には、「三尺阿弥陀金泥仏」について、

建仁二年造始、同三年仏舎利心経仏菩薩種子真言等奉籠于仏身云々。俊乗上人為縁投所有珍財、法眼安阿弥陀仏令造之、施主法橋上人位寛顕、供養導師解脱上人

とあり、重源（一一二一～一二〇六）が資材を投じ、建仁二年（一二〇二）に快慶が製作を開始し、翌年に完成し貞慶が導師をつとめている。

また、貞慶著『明本抄』紙背には「白檀釈迦如来像一躰〈坐像／快慶法眼造〉」を「承元四年（一二一〇）十二月十一日」に貞慶が「永付嘱観心上人了」[13]とあり、快慶作の釈迦像を所有していた。また、付嘱した弟子観心は「峰定寺像」に「法篋印陀羅尼」を納入している「妙門(ママ)釈観心」と同一人物と推察される。

このように、貞慶と快慶の関係は幾つか指摘することが出来る。青木淳氏も快慶と「藤原通憲一門による血縁関係を母体とした関係」[14]を指摘する。

水野氏は後に、快慶像の耳を精査し、毛利氏（補注（9））が宋風を具現した作品とした「峰定寺像」と東大寺中性院弥勒菩薩像（以下、「中性院像」と略記）を「快慶作品から除外」[15]した。そして、「峰定寺像」「中性院像」を検討し、「定覚と想像することも可能」[16]と定覚説を提示した。定覚は康慶「二男」（『本朝大仏師正統系図』（『大日本史料』第四編之七））とあるが、具体的な作品は現存していない。文献から幾つか造像に関わったことがわかる。例えば、『東大寺造立供養記』には、

建久六年正月五日建二中門一也。同年造二二天像。

東多聞天。大仏師快慶。西持国天。大仏師定覚。〈略〉同六月十八日始奉レ造二左右脇士一也。〈略〉観音。大仏師法橋定覚。丹波講師快慶也。各作二半身一。後合二其体一也。虚空蔵。大仏師法眼康慶。同運慶。即父子也。〈略〉同年八月始奉レ造二四天像一也。東方天大仏師法眼運慶。南方天法眼康慶。北方天法橋定覚。西方天快慶也。

（『大仏全』東大寺叢書　一（五三頁下））

とある。全て、建久六年（一一九五）の出来事とするが、『東大寺続要録』造仏篇　にも同様の記事があり、「同六月十八日」以下は翌年建久七年のこととする。定覚は大仏師として持国天像を作製し、また、快慶と観音像を分担し、完成させている。両者は康慶を師とした慶派を代表する仏師であり、親密な関係にあったことがわかる。

次に、「峰定寺像」と作者が同一仏師とされている「中性院像」は興福寺に伝来したものであることを踏まえて、藤岡穣氏は貞慶が南都の弥勒信仰を鼓舞したが、「本像がこの時期に南都で広がりつつあった弥勒信仰の一端を担うもの」とし、「貞慶の関与していた可能性」を推察する。そして、両像の仏師は「東金堂の維摩、梵天、帝釈天を手がけた定慶が最も有力」と結論する。[17] 藤岡氏は貞慶の興福寺復興の「テーゼ」である「伝統図様と宋代図様の融合」を理解し、具現化した仏師として定慶[18]に着目する。

「峰定寺像」作者として名前が挙げられている快慶・定覚・定慶について紹介したが、いずれも貞慶と緊密な関係にあった。仏師の選定は施主丹波入道藤原盛実よりも貞慶の意思が強く働いていたのではと考えられる。

三　貞慶と伝香寺蔵地蔵菩薩像の結縁者

『解深密経』は『八宗要綱』「法相宗」に「華厳と深密と如来出現功徳荘厳と、阿毘達摩と楞伽と厚厳と是なり。」（鎌田茂雄全訳注、講談社学術文庫）とあり、「法相宗所依の本経」（『織田　仏教大辞典』（大蔵出版））であり、他宗派が積極的に用いる経典では無いようである。[19] 当然、仏像に納入されることも希なようである。知り得た限りでは、「峰定寺像」と「伝香寺像」にのみ納入さ

れていることが報告されている。「伝香寺像」には「安貞二年（一二二八）二月」と記された複数の納入品があり、その成立時が確定出来る。「伝香寺像」に関しては杉山二郎氏に詳細な調査がある。[20] それによると『解深密経』以外にも舎利三粒・尼妙法願文・結縁交名・般若心経・木版法華経等が納められている。[21] この「伝香寺像」にも貞慶の強い影響が認められる。尼妙法書「結縁交名」には約二六〇人記されているが、殆ど過去者である。杉山氏は、藤原通憲（信西）の血縁者が八人含まれることを指摘する。貞慶は「信円　覚憲　信憲　貞慶　雅縁　信定」と興福寺の高僧に交じって四人目に見出せ、重要な結縁者の一人であった。「伝香寺像」は貞慶歿後十五年の作製であるが、以下、指摘する如く、貞慶と緊密な関係にあった人物が関わっており、貞慶の強い影響を読み取ることが出来る。

以下、「伝香寺像」と関わった、留意すべき三人の人物について略述する。

・覚澄

「結縁交名」は全五十一行である。その四十一行目を杉山氏は「心阿　覚証　瞻雅　蓮阿」と読む。岩田氏は「心阿　覚澄　瞻雅　蓮阿」と読む（補注(21)）。写真（補注（21））を参照すると、「覚証」は「覚澄」と読むべきであろう。とすると、心阿は伝未詳であるが、瞻雅は納入品『解深密経』を書写した僧であり（後述）、「蓮阿」の署名は幾つかの仏像に見出せるが、「峰定寺像」の「宝篋印陀羅尼」奥書に「蓮阿弥陀仏」と記す僧侶と同一の可能性もある。覚澄は東大寺指図堂釈迦如来坐像（以下、「指図堂像」と略記）の願主ではなかろうか。「指図堂像」の両脚部底面には、

嘉禄元年〈乙酉〉十月十六日於海住山寺造始之同
十一月二日造畢
仏師善円〈持八斎戒〉
同二年〈丙戌〉九月廿二日於梅尾供養導師高弁上人
仏子覚澄

とある。[22] 仏師善円が嘉禄元年（一二二五）十月十六日海住山寺で造り始め、半月後の翌月二日に完成し、翌年九月廿二日に栂尾で、貞慶とも親交があった明恵が供養導師をしている。製作は「造像願文」等から覚澄が母親

の極楽往生を願ってのこととわかる。以下、覚澄と貞慶の関係を考察する。凝然著『律宗綱要』巻下に「戒如上人多生二知人一。乃円晴・覚盛・継尊・覚澄・禅観・蓮意・蓮覚等也。」（『正蔵』七四・一九頁中）とあり、東大寺知足院戒如の高弟とわかる。師の戒如は、凝然著『円照上人行状』上に「其後笠置貞慶上人起二興律願一、普命二門人一令レ講二学之一、〈略〉彼門人有二覚心大徳〈房号慈心〉戒如大徳〈房号知足〉一」とあり、慈心房覚心と併記される程の高弟であった。三者の関係は『諸嗣宗脈紀』上四分律宗（『大日本史料』第五編之十三）に「貞慶―戒如（東大寺知足院）――覚證（ママ）」と端的に示めされている（「覚證」は「覚澄」の誤記か）[23]。覚澄が何時戒如に師事したかは未詳であるが[24]、覚澄は「法相宗学者」で「山城洲相楽郡海住山寺十輪院」（「指図堂像」造像願文）に住しており、晩年に貞慶の教えを直接受けた可能性も否定出来ない。また、「奉造立釈迦牟尼如来像長一尺六寸也」（同）とあり、「峰定寺像」と同じ像長である。貞慶は「一尺六寸」像を幾体か製作しており（補注（3））、ここにも貞慶の影響を読み取ることは出来ないであろうか。覚澄については、後述する。

・瞻雅

「結縁交名」の瞻雅は、杉山氏も指摘する如く、『解深密経』を書写した僧侶であろう。写経の「第十八紙末尾」には、

安貞二年戊子二月廿三日。灯下染筆。願以此微功。／慈尊下生時。必開唯識之悟而已。金剛仏子瞻雅。

とある。瞻雅は『解深密経』書写により「開唯識之悟」ことを願っており、唯識の学僧である。しかし、「金剛仏子瞻雅」と署名している。金剛仏子とは「密教の灌頂を受けた者のこと」（『仏教語大辞典』（東京書籍））である。即ち、瞻雅は密教をも学ぶ唯識僧であった。杉山氏は「結縁交名」の僧侶を精査し、「醍醐系の真言宗遊行聖の足跡」を指摘している。また、貞慶は勿論、興福寺学僧が密教も併修していたことは苫米地誠一氏に詳細な指摘がある[25]。唯識の瞻雅が『解深密経』を書写した時に「金剛仏子」と署名したことも推察出来る。また、海龍王寺所蔵『貝多羅葉梵文』の奥書に、

多羅葉一枚

右此本者、懐範上人伝経秀上人、〻〻〻〻伝覚義法師、〻〻〻〻授□□阿闍梨、〻〻〻〻〻授瞻雅法師、

延応元年（一二三九）（庚子）十月六日伝得之、

（『大日本史料』第五編之十二）

とある「瞻雅法師」も同一僧侶ではなかろうか。苫米地氏の如く、貞慶と密教の関係を理解すると、「峰定寺像」に多くの梵字真言類が見出せる背景も説明出来る。

瞻雅も覚澄と同様に貞慶と関係を有していた僧侶と考えられる。

・善円

「伝香寺像」作者を杉山氏は善円（後、善慶と改名。一一九七～一二五八）[26]と推察する。善円の作品としては、（Ⅰ）承久三年（一二二一）の奈良国立博物館蔵十一面観音菩薩像、（Ⅱ）承久三年十一月～嘉禄二年（一二二六）十二月以前のアメリカ・アジアソサイエティー蔵地蔵菩薩像、（Ⅲ）「指図堂像」、（Ⅳ）「香典寺像」、（Ⅴ）延応二年（一二四〇）の奈良薬師寺蔵地蔵菩薩立像、（Ⅵ）宝治元年（一二四七）の西大寺愛染明王像、（Ⅶ）善慶と改名後の建長元年（一二四九）の同寺釈迦如来像等が報告されている。以下、結縁者を中心に調査し、善円と貞慶の関係を検討してみたい。

（Ⅰ）は善円廿五歳時の作品。像内体部に「権僧正範円」とある。当時、範円（一一五五～一二三一）は二度目の別当在職中（『興福寺別当次第』）である。また、範円は貞慶と同年の誕生であり、興福寺で同時期に修業したと推察される。両者の直接的な関係を示す資料としては、『法隆寺別当次第』に範円法印が別当であった折りに、

（建暦元年）又於上宮王院。釈迦念仏始之。九月六日。依解脱上人勧進。建暦二年壬申九月廿六日。聖霊院観音宝号始之。同上人勧進。

とあり、建暦元年（一二一一）に釈迦念仏を、翌年に観音宝号を貞慶が勧進している。

次に、納入品『金剛般若波羅蜜経』紙背　第一紙に「僧覚盛」とある僧侶に留意したい。興福寺僧侶で同時代の覚盛といえば『諸嗣宗脈紀』上　四分律宗（『大日本史料』第五編之十三）に「貞慶―戒如（招提寺）―覚盛」とある、前述した、覚澄と兄弟弟子の覚盛とすべきであろう。とする

と、『律宗綱要』巻下には注目すべき、

覚盛上人初居二興福寺松院一経二七八年一。後移二唐招提寺一経二於六年一。〈略〉西大寺睿尊大徳最初聴三晴公(円晴)講二事鈔一〈上之一也〉。其後自披二大部一研精詳窮。随二覚盛大徳一聴二表無表章等一。梵網古迹聴二于戒如覚盛一。戒如随二貞慶上人一学二古迹表無表章等一。覚盛随二戒如一聴二表無表章古迹等一。

（『正蔵』七四・一九頁中）

という記事がある。貞慶・戒如・覚盛・睿尊と続く師弟関係が示されている。

三人目に、『金剛般若波羅蜜経』紙背　第二紙に、久野氏が「尊遍」、岩田氏が「□(尊カ)遍」（共に、補注（26））とする僧侶について検討したい。尊遍については既に詳細な調査[27]がある。貞応元年、即ち、十一面観音像が成立した翌年の『維摩会講師研学竪義次第』に「尊遍、〈廿九、丹／波入道〉」とあり、五味氏が「丹波入道」は藤原盛実で、『験記絵』巻第十五第三段の「丹波入道浄恵」と同一人物であると指摘したこと、この丹波入道が「峰定寺像」の施主で、貞慶と緊密な関係にあった帰阿弥陀仏藤原盛実であったことは前述した（補注（4）（5））。その盛実息尊遍が善円作の十一面観音像に、貞慶と信仰を同じくした範円・覚盛と共に結縁していることに留意したい。

（Ⅱ）アジアソサエティー蔵地蔵菩薩像について検討する[28]。像内体部背面に「仏師善円」「権僧正実尊」「前権僧正範円」「法印権大僧都実信[29]」と興福寺高僧の結縁者名が見出せる。範円は前述したので、実尊（一一八〇～一二三六）について略述する。実尊は松殿藤原基房息で嘉禄二年七月二日から安貞二年八月十九日まで興福寺別当であった。また、翌年寛喜元年「十月廿八日辞二法務一。謙二与尊遍得業一申二補権律師一。」（『興福寺別当次第』）とあり、実尊が法務を辞し、譲りとして、前述した尊遍を権律師に補しており、両者は師弟であった。二人の緊密な関係は幾つか知ることが出来る。前述した『験記絵』で丹波入道浄恵が登場する次の段、巻第十五第四段に元仁元年（一二二四）十一月廿七日に前大僧正信円が入滅し、附弟実尊が中陰の事を行った折りに師弟が同夢を見たという話がある。実尊の歿後、尊遍は新薬師寺

蔵地蔵菩薩（景清地蔵）を造立し、師が生前着用していた法服を着せ奉仕していたと推察されている(補注(27))。

藤原盛実には尊遍と同年に生まれ、同じく興福寺で修業した息良遍（一一九四～一二五二）がいる。兄弟の関係は未詳であるが、近しい関係にあったと推察される。良遍は貞慶の高弟覚遍の教えを受けている。良遍と善円の関係は、善慶と改名後の五十三歳の時（Ⅶ）像を作製・安置（「西大寺釈迦如来像造立銘」）し、同七日に「奉開眼供養。導師信願上人。」（『感身学正記』）とあり、信願上人良遍が開眼導師をつとめている。また、宝永七年（一七一〇）良信著『蓮阿菩薩伝』には「建長三年辛亥冬。適罹二病憂一附二属知足院於覚澄一隠二影大聖精舎一。」、また、「嗣法高弟覚澄〈住二于知足院一而継二師之跡一〉」とある。「指図堂像」の願主覚澄は良遍の高弟でもあった。この記事が正確であることは、建長三年十一月廿八日の『良遍遺誡案』「定置　東大寺知足院事」に「然而人法共尪弱、意願未満足、忽受疾病向冥路、仍院坊中遺附覚澄」と、突然病を得た良遍が覚澄に自坊知足院を譲っていることからもわかる。しかし、そこには「毎日地蔵堂勤行不可闕怠者也」（『鎌倉遺文』七三八三）と、毎日の地蔵堂での勤行が義務づけられていた。この地蔵は「知足院ノ地蔵」（『沙石集』巻第七）として著名であり、建久六年九月に貞慶が春日社参籠の折りに「生身ノ御躰ヲ拝見」し「三尺余リノ地蔵菩薩ヲ刻彫」したものを建長三年に安置したと良遍著『知足院縁起』に記している。[30] 良遍・尊遍兄弟は奇しくも生身地蔵[31]を信仰していたことになる。

以上、善円像の結縁僧を中心に貞慶との関係を考察してきたが、他の僧侶も貞慶との関係が指摘出来ると考えられる。では、視点を変えて、仏像と貞慶との関わりを検討してみたい。生前貞慶が鎌倉期興福寺復興に深く関与し、多くの仏師がその意を汲んで活躍したことは、前述した藤岡氏に詳細な論がある（補注（17））。しかし、貞慶の影響はその歿後にも及んでいたのではなかろうか。瀬谷貴之氏は次の如く指摘している。裸地蔵である「伝香寺像」、前述した新薬師寺の景清地蔵像は春日本地仏としての造像であり、「法服姿をとることにより、現

実の僧としての意味が付与」されていた。また、地蔵像に「V字状の襟を表す内衣」を彫刻することも「生身の春日地蔵を示す形制」と指摘する。そして、それらの像の起源として、

生身地蔵として特に知足院像が貞慶一門により説話化・霊験化が進められ、さらに同院が叡尊の西大寺派に受け継がれることにより、広範に流布した[32]とする。

この指摘に従い、V字襟の地蔵像を探すと、東大寺（知足院）・奈良地蔵院・薬師寺に見出すことが出来る（『国宝・重要文化財大全』3　彫刻（上巻）（毎日新聞社）参照）。この中で、薬師寺像は前述した善円作（V）に該当する。また、（Ⅱ）もV字襟である（補注（28））。瀬谷氏の指摘によると、貞慶の影響の基に作製された善円作の仏像は、（Ⅱ）・（Ⅳ）・（V）の三作品となる。また、（Ⅰ）・（Ⅲ）・（Ⅶ）にも貞慶と緊密な師弟関係にあった僧侶が結縁しており、これらの作品も貞慶の影響を無視することは出来ない。長谷川誠氏は（Ⅵ）を中心に、善円・叡尊との出会いの経緯を「当時の南都教学系譜に共通した知遇関係[33]」と、特定の僧侶名を明示しないが、上述したことから、「貞慶を介した知遇関係」とすべきではなかろうか。

以上、「峰定寺像」「伝香寺像」という『解深密経』が納入されている仏像について検討してきたが、両像共に貞慶の影響を強く受けていたことがわかった。貞慶が後世に及ぼした影響は幅広いものであったことが推察される。以後の考察は次稿に譲りたい。

四　『解深密経』の翻刻と若干の考察

翻刻について

（1）翻刻に際しては底本に忠実であることを旨とした。

（2）旧漢字・異体字・略体字等は正体字に改めたが通行の字体を用いたところもある。

（3）底本の行数を尊重し、そのまま翻刻し、五行目毎に行数を算用数字で付した。結縁文には漢数

字を付した。

（4）井上氏の調査によると『解深密経』は「紙本墨書　一巻　縦一四・三cm　全長二九八・〇cm」（補注（2））。

1　解深密経勝義諦相品
最勝子言一切法无二一切
法无二者何等一切法云何
為无二
5　一切法者略有二種所謂有
為无為是中有為非有
為非无為无為亦非无為
非有為
10　言有為者乃是本師仮施
設句即是遍計所集言
辞所説即是究竟種種
遍計言辞所説不成実故
非是有為
言无為者亦堕言辞設離
15　有為无為少有所説其相亦
尓然非无事而有所説何
等為事謂諸聖者見離名言
故現正等覚即於如是離言
法性為欲令他現等覚故仮
20　立名想謂之有為
仏説離言无二義
甚深非愚之所行
愚夫於此癡所惑
楽著二依言・戯論
25　内証无相之所行
不可言説絶表示
息諸諍論勝義諦
超過一切尋思相
30　若勝義諦相与諸行相都无
異者応於今時一切異生皆已
見諦又諸異生皆応已得无
上方便安穏涅槃或応已証

阿耨多羅三藐三菩提
若勝義諦相与諸行相一向
異者已見諦者於諸行相応
不除遣若不除遣諸行者応
於相縛不得解脱於諸相縛不
解脱故於麁重縛亦応不脱
応不能得无上方便安穏涅槃
或不応証阿耨多羅三藐三
菩提
行界勝義相　離一異性相
若分別一異　彼非如理行
若一切法真如勝義法无我性
亦異相者是則真如勝義法
无我性亦応因従因所生若
従因生応是有為若是有
為応非勝義
心意識相品
於六趣生死彼彼有情堕彼
彼有情衆中或在卵生或在
胎生或在湿生或在化生身分
生起於中最初一切種子心識
成就展転和合増長広大
依二執受一者有色諸根及所
依執受二者相名分別言説
戯論習気執受有色界中
具二執受无色界中不具二
種広慧此識亦名阿陀那識
何以故由此識於身随逐於
執持故亦名阿頼耶識何以故由此識於
身摂受蔵隠同安危故亦名
為心何以故由此識色声香味
触等積集滋長故広恵阿陀
那識為依止為建立故六識身
転
阿陀那識甚深細
一切種子如暴流
我於凡愚不開演
恐彼分別執為我

一切法相品
謂諸法相略有三種何等・為三
一者遍計所執相二者依他起相
三者円成実相
謂一切法名仮安立自性差別
乃至為令随起言説
謂一切法縁生自性
謂一切法平等真如
无自性相品
我依三種无自性性密意説
言一切諸法皆无自性所謂相
无自性性生无自性性勝義
无自性性
若一向趣寂声聞種姓補特伽
羅雖蒙諸仏施種種勇猛
加行方便化導終不能得不能
令当坐道場証得阿耨多羅
三藐三菩提何以故由彼本来
唯有下劣種姓故一向慈悲薄
弱故
分別瑜伽品
菩薩法安立及不捨阿耨多羅
三藐三菩提願為依為住於
大乗中修奢摩他毘鉢舎那
四種所縁境事一者有分別影
像所縁境事二者无分別影
像所縁境事三者事辺際
所縁境事四者所作成弁
所縁境事
地波羅密多品
菩薩十地所謂極喜地離垢
地発光地焔恵地極難勝
地現前地遠行地不動地
善恵地法雲地復説仏地
如来成所作事品
善修出離転依成満是名
如来法身之相

110 由法身故説有差別如来法
身有差別故无量功徳最
勝差別一切如来化身
作業如世界起一切種類
如来功徳衆所荘厳住持
115 為相

一 衆生无辺誓願度
煩悩无辺誓願断
法門无尽誓願知
无上菩提誓願証

五 南无釈迦牟尼如来応
正等覚明行円満善逝
世間解无上丈夫調御士
天人師仏世尊

十 南无文殊師利菩薩
南无普賢菩薩
南无弥勒菩薩
南无観世音菩薩
南无地蔵菩薩
十五南无舎利弗等諸大弟子
南无一切三宝
法相擁護春日大明神
梵釈護世諸天善神

廿 生々世々発菩提心
値遇大聖報恩利生
自他同証无上菩提
仏子貞慶生々世々
与此沙門常為善友
廿五共詣霊山同仕本師

校異

(1) 校異は大正新脩大蔵経本(巻十六)の脚注を参照。『大正新脩大蔵経勘同目録』によると玄奘訳『解深密経』は高麗本を底本(以下、㊟と略記)とする。宋本・元本・明本(以上、三本共通な場

合には㊂と略記。また、㊋・㊍・㊐と個別に略記する場合もある）・宮内省図書寮本（㊫と略記）・正倉院聖語蔵本（㊬と略記）。貞慶写と異なるも、他本に校異なき場合は、㊟のみで記す。

（2）引用箇所については、井上氏により調査がなされており（補注（2））、参照した。

（3）改行、もしくは、一字程度の空白をおくことにより、異なった箇所からの引用がなされている。故に、行数を重複して記す場合がある。

1　『正蔵』一六・六八八頁下。
2～4　同・六八八頁下。
5～8　同・六八八頁下。㊟「一切法者略有二種。一者有為二者無為。」、㊂・㊫「所謂有為」。
9～10　同・六八八頁下。
10～11　同・六八九頁上。㊟「即是遍計所執言辞所説。」、㊂・㊫・㊬「集」、以下同。　㊬「設」
11～13　同・六八九頁上。
14～20　同・六八九頁上。9～10の次に記される。記述箇所が異なる。㊟「亦堕言辞施設。」、㊂・㊫「施」なし。㊟「謂諸聖者以聖智聖見離名言故。」。㊟「現等正覚。」、㊂・㊫「現正等覚」。㊟「仮立名想謂之有為。」、㊋・㊐「相」。
21～24　同・六八九頁下。
26～29　同・六九〇頁上。
30～42　同・六九〇頁中。㊟「又諸異生皆応已得無上方便安穏涅槃。」、㊫「人」。㊟「若不除遣諸行相者。応於相縛不得解脱。此見諦者於諸相縛不解脱故。於麁重縛亦応不脱。由於二縛不解脱故。已見諦者応不能得無上方便安穏涅槃。」。
43～44　同・六九一頁中。
45～49　同・六九二頁上。㊟「亦応有因従因所生。」。
50　同・六九二頁上。
51～67　同・六九二頁中。㊟「心識成熟展転和合増長広大。」。

61行最後の文字は「於」を記した上に、他の字の重書を試みたが中断したか。

62行は61・63行の間に小書きで記される。㊟「由

此識於身摂受蔵隠同安危義故。」。

68～71　同・六九二頁下。㊟「阿陀那識甚深細　我於凡愚不開演　一切種子如瀑流　恐彼分別執為吾」、㊀・㊫・㊯「阿陀那識甚深細　一切種子如瀑流　我於凡愚不開演　恐彼分別執為吾」。

73　同・六九三頁上。

74～76　同・六九三頁上。

77～78　同・六九三頁上。㊟「謂一切法名仮安立自性差別。」、㊫「仮名」。

79　同・六九三頁上。

80　同・六九三頁上。

81　同・六九三頁下。

82～85　同・六九四頁上。

86～92　同・六九五頁上。㊟「若一向趣寂声聞種性補特伽羅。」、㊫「姓」。㊟「雖蒙諸仏施設種種勇猛加行方便化導。」。88～89行「終不能得不能令当坐道場証得阿耨多羅三藐三菩提。」、とあるが、㊟ナシ。㊟「何以故由彼本来唯有下劣種性故一向慈悲薄弱故」、㊀・㊁「雖」、㊅・㊫「惟」。

93　同・六九七頁下。

94～96　同・六九七頁下。

97～101　同・六九七頁下。

102　同・七〇三頁下。㊟「地波羅蜜多品」

103～106　同・七〇三頁下。

107　同・七〇八頁中。

108～109　同・七〇八頁中。

110～112　同・七〇八頁中。

112～115　同・七〇八頁中～下。

重複することにもなるが、校異の過程で明らかになった二点を指摘してみる。

第一点は、貞慶が抄出した経典は大蔵経が底本としている高麗版本ではなく、宋版であったことが指摘できる。

前述した如く、『大正新脩大蔵経勘同目録』によると大蔵経本は高麗版本を底本としている。貞慶と親交のあった重源が建久六年（一一九五）「十一月七日、春乗房聖人被施入唐本一切経於当寺」（『醍醐寺座主次第』）と醍醐寺に「唐本一切経」の施入しているが、これが「宋

版一切経」であったことは報告されており、渡宋した慶政（一一八九～一二六八）が持ち帰った経典も同版であった。[34] 貞慶の参照した本文が高麗版と異なるのは校異を参照すれば明らかである。

第二点は、脱字・訂正・誤記等が多く貞慶が急いで書写したと推察される。脱字は校異で示したが、24・74行目には「戯」・「為」を書き落とし、傍書している。また、61行と63行の間には62行の十六字を脱落し、後で行間に小書きしている。数カ所一字の脱落が見出せるが、88～89行では「終不能得不能」の三字が付加されている。上の三字との関係で誤記が生じたと推察される。順序の相違・傍書・行間に小書きされた箇所等、一見したのみで清書されたものではないことがわかる。納入経文はこのようなものが普通であったのであろうか。または、貞慶が急いで抄出したのか、後に清書することを意図しながらもそれが果たせなかったことを示しているのであろうか。

補注

（1）峰定寺蔵金剛力士像に関しては、毛利久「金剛力士像」『日本彫刻史基礎資料集成　平安時代造像銘記篇　五』〈解説〉（中央公論美術出版。一九七〇年）、赤松俊秀「峰定寺蔵金剛力士像について」『史迹と美術』第四十輯ノ四（一九七〇年五月）、中野玄三「峯定寺諸像の系譜－長寛元年造立仁王像の銘文を中心にして－」『国華』第九二六号（一九七〇年九月）等がある。

（2）井上「釈迦如来像」『日本彫刻基礎資料集成　鎌倉時代　造像銘記篇　一』〈解説〉（中央公論美術出版。二〇〇三年）。

（3）井上氏の驥尾に付して、野村「京都峰定寺釈迦如来像納入品と貞慶」『国語国文』第七十五巻第二号（二〇〇六年二月）で貞慶との関係を論じた。

（4）五味著『絵巻を読む歩く　『春日験記絵』と中世』（淡交社、一九九八年）、同『明月記の史料学』（青史出版、二〇〇〇年）等。

（5）野村「『春日権現験記絵』と丹波入道」『国語国文』第六十九巻第九号（二〇〇〇年九月。後、拙著『中世仏教説話論考』（和泉書院。二〇〇五年）再録）。

(6) 西念については、『兵範記』保元元年六月四日、十二日、廿一日、七月二日の記事を参照。

(7) 明珍「木造釈迦如来立像」『東洋美術』第十六号（一九三二年十一月）。

(8) 水野「法性寺安阿弥陀仏と解脱房貞慶」『MUSEUM』第九十二号（一九五八年十一月）。

(9) 毛利著『仏師快慶論』（吉川弘文館。一九六一年。増補版　一九九四年）。

(10) 清水「鎌倉彫刻における「宋風」について」『南都仏教』第二十五号（一九七〇年十月。後、著書『仏教美術史の研究』（中央公論美術出版。一九九七年）再録）。

(11) 毛利「美術史料としての浄土寺縁起」『国史論集』（赤松俊秀教授退官記念事業会。一九七二年。後、著書『日本仏像史研究』（法蔵館。一九八〇年）再録）。

(12) 補注（9）より引用。なお、『東大寺雑集』は『仏書解説大辞典』『国書総目録』にその書名を見出すことが出来ない。

(13) 田中稔「興福寺所蔵　覚遍本明本抄および紙背文書」『奈良国立文化財研究所年報』一九六〇年。

(14) 青木「仏師快慶とその信仰圏」『日本仏教の形成と展開』（伊藤唯真編。法蔵館。二〇〇二年）。

(15) 水野「快慶作品の検討」『美術史』第四十七号（一九六三年一月。後、著書『日本彫刻史研究』（中央公論美術出版。一九九六年）再録）。竹内沙織「仏像の条帛背面の形式について―運慶・快慶作品を中心に―」『史友』（青山学院大学史学会）第三十九号（二〇〇七年三月）には「作者は快慶に近い工房の仏師」とある。

(16) 水野「宋代美術と鎌倉彫刻」『国華』第一〇〇〇号（一九八二年五月。後、補注(15)の著書に再録）。

(17) 藤岡「解脱房貞慶と興福寺の鎌倉復興」『学叢』（京都国立博物館）第二十四号（二〇〇二年五月）。

(18) 仏師定慶について『国史大辞典』（吉川弘文館）には「定慶の名は文献上にはみえない」とある。『高山寺縁起』には二度「定慶」の名と作品が記されている。この「康運、改名定慶」とある「定慶」

は「肥後定慶」と呼ばれている仏師であり、湛慶の弟である（松島健「鎌倉彫刻―慶派仏師を中心に―」『中世寺院と鎌倉彫刻』（原色日本の美術九。小学館。改訂第三版。一九九四年）。

また、『諸寺縁起集』〈菅家本〉の最後には「名仏師」として「定慶（南都）」とあるが、どちらの定慶を指しているのであろうか。

(19) 高山寺蔵『東域伝灯目録』には玄範や円測等の「解深密経疏」が見出せるが、撰者永超（一〇一四～九五）は興福寺の僧侶（『高山寺本東域伝灯目録』（高山寺資料叢書　第十九冊。一九九九年）月本雅幸「高山寺東域伝灯目録書誌解題」）である。

また、日蓮遺文には幾つか「解深密経」「深密経」と経名が記されている。しかし、それらは「謗実許権者（トハ）、法相宗也。」（「実相寺御書」）という論理の中で、「深密経へすかしをとす悪友は、玄奘・慈恩是也。」（「兄弟鈔」）の如く法相宗を批判するために引用されている。

(20) 杉山「伝香寺裸地蔵菩薩像について」『MUSEUM』第一六七号（一九六三年二月。後、著書『日本彫刻史研究法』（東京美術。一九九一年）再録）。

(21) 「伝香寺像」については『日本彫刻史基礎資料集成　鎌倉時代　造像銘記篇　四』〈図版〉（中央公論美術出版。二〇〇六年）に詳細な写真がある。また、岩田茂樹「地蔵菩薩像」（『同』〈解説〉）も参照。

(22) 引用は田邉三郎助「釈迦如来像」『日本彫刻史基礎資料集成　鎌倉時代　造像銘記篇　四』〈解説〉（中央公論美術出版。二〇〇六年）。以下、同。また、解説も参照。

(23) 良遍著『知足院縁起』には「東大寺新別所、知足院ハ依レ為二法相ノ旧跡一」とあり、知足院は法相学の寺院であった。また、凝然著『円照上人行状』中にも「知足院□房号性舜諱覚澄矣。法相宗学者」とあり、覚澄がその東大寺知足院に住していたことからも『諸嗣宗脈紀』の記述は覚証ではなく覚澄と考えられる。師の戒如は貞慶の

著書や思想を後世に残す役割を果たしており、例えば、『解脱上人戒律興行願書』・『僧戒如書状』（鎌倉遺文・五七九〇）や「律学を唱へ奉る事」（『鎌倉旧仏教』（日本思想大系。岩波書店）「解説」（田中久夫））等を記している。また、文暦元年（一二三四）十二月廿七日の『山城海住山寺学衆等連署起請文案』（鎌倉遺文・四七一六）には覚心等と共に署名している。覚澄は貞慶・戒如と続く法脈を受け継いだ学僧であったことがわかる。

(24) 『東大寺続要録』仏法篇　世親講始行事　には建久六年（一一九五）十月日の「世親講事」には三十四人の僧名が記され、その中に「覚澄法師」とある。『本朝高僧伝』巻第十五には建長年中（一二四九～五六）に知足院に住していたとある。論じている「覚澄」とするには年齢的に少し無理であろうか。

(25) 苫米地「平安期興福寺における真言宗について」『仏教文化論集』（川崎大師教学研究所紀要）第九号（二〇〇三年十二月）、同「解脱房貞慶と興福寺真言宗」『インド学諸思想とその周延』（仏教文化学会十周年・北條賢三先生古稀記念論文集。山喜房仏書林。二〇〇四年）。

(26) 「伝香寺像」を善円作する、猪川和子「名匠善円と後継者たち」『日本美術工芸』第四〇六号（一九七二年七月。後、著書『日本古彫刻史論』（講談社。一九七五年）再録）、松島（補注（18））、岩田（補注（21））等の論がある。一方、善円の名前が見出せないことから消極的な田邉三郎助「鎌倉中期の奈良仏師－いわゆる善派を中心に－」『西大寺と奈良の古寺』（日本古寺美術全集六。集英社。一九八三年。後、著書『田邉三郎助彫刻史論集』（中央公論美術出版。二〇〇一年）再録）もある。

また、善円と善慶は同一人物であることが判明した。山本勉「十一面観音菩薩像」『日本彫刻史基礎資料集成　鎌倉時代　造像銘記篇　三』〈解説〉（中央公論美術出版。二〇〇五年）により、生没年を記した（なお、「納入品の項」は岩田茂

樹担当)。

「伝香寺像」に言及してはいないが、善円については久野健「大仏師善円とその作品」『美術研究』第二四〇号(一九六六年三月。後、著書『日本仏像彫刻史の研究』(吉川弘文館。一九八四年)再録)がある。これらの論稿を参照した。

(27) 副島弘道・長沢市郎・水野敬三郎・藪内佐斗司「新薬師寺地蔵菩薩修理報告」『東京芸術大学武術学部紀要』第二十一号(一九八六年三月)、水野敬三郎「地蔵菩薩像」『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 五』〈解説〉(中央公論美術出版。二〇〇七年)。

(28) 山本勉「地蔵菩薩像」『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 四』〈解説〉(中央公論美術出版。二〇〇六年)参照。

(29) 製作時期は範円と実尊の経歴を『興福寺別当次第』を参照して判断された。実信は『明月記』嘉禄二年五月廿七日の最勝講では、「証義者、前権僧正範円、法印聖覚、法印権大僧都実信」と記され、翌年安貞元年四月廿四日には「権僧正実信」とあり、製作時期と合致する。

(30) 西川杏太郎氏は地蔵菩薩像は「建長三年に」「あまり隔たらぬ頃の造像」(『奈良六大寺大観』東大寺三(岩波書店。一九七二年))とするが、中村康氏は「像の製作が」「十三世紀半ばを降る可能性」(『同』補訂版(岩波書店。二〇〇〇年))を指摘する。

(31) 「生身論」は奥健夫「如来の髪型における平安〜鎌倉初期の一動向—波状髪の使用をめぐって—」『仏教芸術』第二五六号(二〇〇一年五月)、同「裸形着装像の成立」『MUSEUM』第五八九号(二〇〇四年四月)、同「生身仏像論」『創造の場』(講座日本美術史 第四巻。東京大学出版会。二〇〇五年)等、また、諸氏による多くの論稿があり、参照したが「峰定寺像」等との関わりの検討は次稿に譲る。

(32) 瀬谷「春日三宮・法服式地蔵菩薩像について—生身地蔵信仰と解脱房貞慶の周縁—」『美術史』

第一五四号（二〇〇三年三月）。

(33) 長谷川「西大寺愛染明王像とその前後」『仏教芸術』第六十三号（一九九六年十二月）。

(34) 妻木直良「慶政上人と北宋福州版大蔵経」『禅宗』第二十二巻第一号（一九一五年一月）、大屋徳城「宋版一切経の請来と奄然及び重源」『寧楽』第五号（一九二六年）、森克己「宋版一切経輸入に対する社会的考察」著書『日宋文化交流の諸問題』（刀江書院。一九五〇年）。宋版一切経については、橋本凝胤「宋版一切経考」『大和志』第二巻第一号～第四号（一九三五年一月～三月。後、著書『仏教教理史の研究』（全国書房。一九四四年）再録）、等参照。

補注等で示さなかった引用は次のとおり

・『大悲山寺縁起』・『法隆寺別当次第』は続群書類従。『東大寺造立供養記』・『興福寺別当次第』・『本朝高僧伝』は大日本仏教全書。『吉記』は増補　史料大成。『春日権現験記絵』は神道大系。『東大寺続要録』・『円照上人行状』は続々群書類従。『吾妻鏡』は新訂増補　国史大系。『諸寺縁起集』〈菅家本〉は『校刊美術史料　寺院篇』（中央公論美術出版）。『高山寺縁起』は『明恵上人資料』第一（高山寺資料叢書。東京大学出版）。日蓮遺文は『昭和定本　日蓮聖人遺文』（総本山身延山久遠寺）。『明月記』は国書刊行会。「西大寺釈迦如来像造立銘」『感身学正記』は『西大寺叡尊伝記集成』（法蔵館）。『蓮阿菩薩伝』は日本大蔵経。『沙石集』は日本古典文学大系。『知足院縁起』は『東大寺宗性上人之研究並史料』中。『醍醐寺座主次第』は『俊乗房重源史料集成』（奈良国立文化財史料第四冊）。

※引用に際しては一部表記を改めた。

付記

冒頭にも記した如く、峰定寺副住職中村覚祐氏より同寺ご所蔵の釈迦如来像納入品、貞慶著「解深密経及び結縁文」翻刻の許可を賜った。また、奈良国立博物館より写真版の提供を受けた。井上一稔氏からは写真版の入手について懇切なるご指導を賜った、記してお礼申し上げる。